惑星の風来坊

ゴリヴォーグ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
惑星の風来坊

【Ｎコード】
Ｎ８９９６Ｔ

【作者名】
ゴリヴォーグ

【あらすじ】
これはありふれた初恋の物語。だから旅する理由も彼女といたいから、彼女を守りたいから。これ以上ない単純な理由。荒廃した世界に生きる少年ユアン・コーファは追われる少女アメリアと出会う。そこから始まる冒険の物語。英雄なんか、必要ない。

戦争は終わらない。

戦いが終われば戦争は終わるというのか、戦後といっていいのか。終わったと見て見ぬ振りをしているだけだ。各国の盟主たちが名を連ね、惑星の最高権力を有する『政府』と、彼らの支配に抗い自由を求めた『市民』の二大勢力によって引き起こされた惑星を巻き込んだ戦争が残したものは、５００年にも及ぶ『政府』の崩壊と、この星に残された者たちの癒えない心の傷。一度与えられた絶望はそう簡単に消えやしない。歴史だけを見ると『市民』たちの勝利といえただろう。しかし彼らに惑星をまとめる力はないに等しく、結果惑星に住む者たちにとっては意味のない戦いに終わってしまった。この戦争に勝者なんかいないのだ。

そんな中、自由気ままに旅をする者たちがいた。町から町へ渡り、自分たちの目的のため終わらないた旅をする彼らを、人々は風来坊と呼んだ。彼らは便利屋家業から、トレジャーハンターや単なるゴロツキまで多岐に渡った。生きる意味をなくした人々が暮らすこの荒廃した惑星において、彼らは人々の憧れの対象でもあった。

ここにも、風来坊に憧れる少年が一人、彼の名はユアン・コーフア。物語は彼が一人の少女と出会うことから始まる。これは、やがてこの世界を巻き込んむことになる初恋の物語。英雄なんか必要ない。

ユアン・コーファ

ユアン・コーファ。崩壊したこの世界において、珍しいぐらいに緑がある辺境の町、コリーに住む１４歳の少年だ。１４歳という難しいい年頃にしては少しばかり甘えん坊な所があるが、裏表無い素直な性格で、町のみんなに愛されていた。

そんな彼も、今日この町を出て行く。

「ハンカチ持った？　忘れ物はない？　後これ、お腹がすいたら食べて頂戴」

まるで幼児にするように、母は言う。

「もう、僕はもう１４歳だよ？　いつまでもうっかりユアンじゃないんだよ」

そそっかしく忘れ物が多かったユアンを周りはそう呼んでいた。彼にとっては屈辱的だったらしく、歳を重ねるにつれて、昔ほどのうっかり屋ではなくなった。

「ほんと、可愛い赤ん坊かと思っていたらこれだもの。時間の流れってのは怖いわね……」

彼の母親ブリジットは感慨深げに言う。腹を痛めた子供が旅に出るのだ。それもいつ帰ってくるかわからない果てのない旅に。寂しいわけがないのだ。

「母さん、今までありがとう」

これまで育ててくれたことの感謝の念を伝える。まるでこれから死ぬみたいな言い方ね――ブリジットはそう思うと、自然と感情が抑えられなくなる。――あーあ、涙なんか見せないって決めてたのに。

「ばか！　そういう台詞言わないでくれる？　今になって寂しくなってくるじゃん……」

堪えきれなくなった涙を流し、最愛の息子を抱きしめる。例えどんなに離れていても、子供のことを常に思っているのが親というも

のだ。
「安心して。いつかここに帰ってくるから。そりゃあいつになるかって分からないけどさ、そん時はさ、アップルパイ焼いてくれたら嬉しいなぁ、なんちて」
あのアップルパイが食べれなくなるのは寂しいな、なんて思うと決意が鈍ってしまう。これじゃ前に進めなくなりそうだった。
「もうしょうがないわね。そんなに食べたきゃ、私が死ぬまでに無事帰ってきなさいよ？」
呆れたように言う。でも彼女の顔には笑顔が浮かんだ。やっぱり大きくなってもこの子は変わらないな。少しばかりそれがおかしくなる。
「うん。期待しているよ。それじゃあ、いってきます。」
「いってらっしゃい。ミリアちゃんによろしくね」
これはサヨナラなんかじゃないんだただちょっと家を出るだけ、いつもより遠出をするだけだ。そう心に言い聞かせる。今ここに、新米風来坊ユアン・コーファが誕生した。

「行ったか」
息子の姿が見えなくなると、ブリジットは部屋にある父親の写真に声をかける。そこに、父がいるかのように。
「あなた、ユアンがいなくなっちゃった。ちょっと寂しいけど、いつか帰ってくるその日までアップルパイを焼いておくわ」
写真は返事しない。
「もしさ、どっかの町でユアンにあったら彼を助けてあげて頂戴。なんだかんだ言ってもあの子そそっかしいからさ、どっかであわてていると思うよ？」
どこか遠くにいる人間に言い聞かすように言う。
「たまには帰ってきなさいよ？　リチャード」

――

「さて、まずはシルバに行こうかな。港町だし、困ってる人がたくさんいるはずだしね」

港町シルバは、大陸中の交易の中心になっている。当然そのように栄えた町には人がたくさん集まる。そしてなにより、

「リオンの像も見ておきたいし」

シルバにはすべての風来坊が憧れる存在といっても過言ではない世界最初の風来坊、リオン・ワーテの像がある。彼が生まれ育った町ということもあり、風来坊が一番最初に訪れるべき聖地ともされている。彼らはリオンの像に旅の無事を願うのだ。そのような町だから、先輩風来坊もたくさんいるだろう。なったばかりホヤホヤのユアンにとって、先人たちのアドバイスというのは得がたいものなのだ。

「そんじゃ、のんびり行きますかね」

目的も特になく、旅の理由もこれから決めればいい。なんに縛られることのないユアンの自由な旅が始まる。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8996t/

惑星の風来坊

2011年6月7日16時55分発行